第64回 日中認知症ケア交流レポート①

日中福祉交流コーディネーターが見る

上海福祉の今

日中福祉プランニング代表　王　青

プロフィール
中国上海市出身。1989年留学のため来日。語学学習を経て大阪市立大学経済学部卒業。95年より日本企業介護福祉関係部署に勤務。上海市民政局や、上海市障害者連合会などとの長年の親交があり、上海市と日本の介護福祉分野の交流・ビジネスを支援してきた。2002年7月フリーに。福祉分野を中心に日中のコーディネーターとして活動中。市場調査、マスコミ取材、ビジネス支援、視察企画など多くの案件を実現してきており、上海福祉分野に関しては第一人者である。

認知症ケアへの関心高まる

日中福祉プランニングの取り組みが、トヨタ財団の国際交流助成事業に採択されました。テーマは「日中認知症ケア交流――学び合いから共感へ」。この1年間のプロジェクトでは、日本と中国でそれぞれ4～5名の専門家チームを作り、ワークショップや相互訪問、公開シンポジウムなどを実施していきます。その関連イベントとして、「上海認知症ケア視察交流ツアー」が3月27日～30日に開催され、日本からは30名が参加しました。

上海は高齢者政策などの取り組みについて、国内では常にトップランナーですが、認知症ケアに関しては、例外です。認知症に関する研究が遅れているほか、正確な統計や診断がなく、受診率も低いのです。

また、「生活ケア」より「治療」が中心のため、認知症の場合、精神科に通院・入院するのが一般的です。徘徊や暴力などの周辺症状や事故の恐れのある認知症の人は施設への入居を拒絶されることが多く、裏を返せば、殆どの施設は認知症の対応についてわからないのです。その結果、家族が在宅で介護を行っているのが現状です。

そのような中で、今回の日中認知症ケアの交流は大きな意義を持ちます。

ツアーでは、地域密着の小規模多機能施設を見学したほか、民間介護施設や上海市民政局を含む5つの行政機関との会談、さらには認知症ケアに詳しい医療や経営に関する専門家によるシンポジウムを開催するなど、濃厚な内容で構成されました。

3日目には、ハイライトとなる日中認知症ケア公開シンポジウムを上海の名門大学「華東師範大学」にて開催しました。

▲シンポジウムは満席だった

このシンポジウムは事前申込制でしたが、申込開始わずか半日で、80名を超える申込があり、翌々日には満員となりました。申込ができなかった人からも「何とかしてくれますか？参加したい！」とひっきりなしに連絡がきました。正直、こんなにも反響があるとは予想していませんでした。

上海では最近、介護ビジネス関連のシンポジウムなどが多く開催されています。ただ、それらの殆どが投資やコスト回収、利益創出をテーマにしたもので、介護理念やサービス、高齢者視点からの議論はありませんでした。

次回は、大きな脚光を浴びた現地でのシンポジウムと上海市政府との会談についてご報告します。